聞こえない声を響かせる

A Christmas Carol における音と声

木島菜菜子

1843 年の出版直後から人気を博したディケンズの『クリスマス・キャロル』は、日本においても最もよく知られ、読まれてきた英文学作品の一つだと言える。その一方で本作品の構成や細部には、いまだに分析の余地が残されているように思われる。本発表は、作品の中の音や声に関する表現に着目することで、最後に改心にいたるスクルージの心境の変化を彼が耳にする音の変化に読み取り、スクルージに代表される当時の社会層が聞こうとしなかった、子どもたちを含む社会的弱者の声を響かせようとした物語として、この作品を読むものである。

1. 死者の声を聞かせる

この作品の書き出しは、スクルージの元共同経営者のマーレイが死んでいることを確認するところから始まる。作品第 4 節において、フロイトの言う夢の中の「死の慣用的な表現」(296)を体現している未来のクリスマスの幽霊が言葉を発しないように、作品冒頭の時点で死者であるマーレイは、本来声を持たないはずである。そのマーレイは、第 1 節で亡霊として登場する前に、スクルージの家のドアノッカーとして物語の中に初めて登場する。これは事務所から家に帰ってきたスクルージがドアを開けようとした瞬間、ドアのノッカーが死んだマーレイの顔に変わるという有名な場面である。ディケンズの作品においては、無生物が生物のように振る舞ったり、生きた人間が無生物のようになったりする現象がしばしば起こるが、このドアノッカーがマーレイの顔に変わるという瞬間もそのような例の一つであり、ここでは、この後マーレイが亡霊としてスクルージの家の中に入ってくることを予告しているのだと言える。ではなぜマーレイは、例えばドアノブなどではなく、ノッカーとなったのだろうか。

ノッカーは、家の中にいるものに来客があることを音で知らせるものである。死んだマーレイがスクルージの前に姿をあらわそうとするとき、まずノッカーとして現れたのは、死んで声を失ったマーレイがその喪失した音声を回復しようとしているためなのではないだろうか。

それを示唆するかのように、続くテクストの中にはうるさいほど音への言及が見られる。以下の引用はドアノッカーが元の形に戻り、家の中に入ったスクルージがドアを閉めた直後の描写である。

> The sound resounded through the house like thunder. Every room above, and every cask in the wine-merchant's cellars below, appeared to have a separate peal of echoes of its own. Scrooge was not a man to be frightened by echoes. (15)

この場面で、ドアの閉まる音の反響が家中に雷のように響き渡り、この音はあらゆる部屋にこだまになって響く。しかし引用した最後の一文には、スクルージはそのようなこだまに驚くような人物ではない、とある。このこだまは声を回復しようとするマーレイの働きかもしれないが、この時点のスクルージには何の作用も及ぼさない。

その後、スクルージがリビングでくつろいでいると、始めにベルが誰も鳴らしていないのに勝手に鳴り始め、そしてマーレイが音を立てて歩いてくる。このようにスクルージに聞かせる準備をした上でマーレイの亡霊は「聞け！」(22)と叫び、自分が話すことをスクルージに聞かせようとする。その声はスクルージの骨の髄にまで響くような声である。このように、家に帰ってきた時点ではドアの音の反響になんとも思わなかったスクルージが、次第に音に影響を受けるようになっていき、それまで聞こえなかった音や声がその耳に聞こえ始める。

こうした、声を失ったはずの死者の声、本来聞こえないはずの死者たちの声をスクルージに聞かせることは、この物語の主題の表現の準備段階にあたるように私には思われる。作品冒頭で『ハムレット』に言及し、さらに死んだマーレイにドアノッカーとして登場させ、その後スクルージにその声を聞かせるということは、聞こえなくなっている声にスクルージの、ひいては読者の、注意を喚起しているのではないだろうか。

2. こだまが響く

第 3 節では過去のクリスマスの幽霊がスクルージを自分の子ども時代に連れていく。この箇所は、Tillotson も述べるように、心の冷たいスクルージが心を動かされる最初の場面、いわば物語最後に改心することになる

スクルージの、心境の変化の第１歩目と言える。
実はこのスクルージの心境の変化は、引用にあるように彼に聞こえる物音の形でも表現されている。

> Not a latent echo in the house, not a squeak and scuffle from the mice behind the panelling, not a drip from the half-thawed water-spout in the dull yard behind, not a sigh among the leafless boughs of one despondent poplar, not the idle swinging of an empty store-house door, no, not a clicking in the fire, but fell upon the heart of Scrooge with a softening influence, and gave a freer passage to his tears. (31, my underlines)

第１節からの前の引用では、家中に響き渡るこだまはスクルージの精神には何の影響も及ぼさなかったのに対し、ここでは "latent echo"すらスクルージの心にひびく。
さらにその後スクルージは、「無知」と「貧困」という二人の子供たちに出会う。スクルージがこの子たちには頼るものがないのですか、と幽霊に尋ねると、幽霊は、'Are there no prisons?'、'Are there no workhouses?' (67)と答える。これまでにも指摘されてきたように、スクルージの質問に対する幽霊のこの返答は、スクルージ自身が第１節で、貧者に手を差し伸べることを断った言葉のこだまである。現在のクリスマスの幽霊の足元にいる子供たち、「無知」と「貧困」は、何も言葉を発さないが、幽霊が彼らに代わって答えるのである。

3. 鍛冶屋のハンマーを打ち下ろす

1834 年の新救貧法成立に代表される 1830 年代以降の社会の空気には、マルサスやベンサムの思想の影響があることはこれまでにも指摘されてきた（Parker 164）。貧困は個人の責任であり、富裕層には社会の貧困に責任はない。子どもたちへの救済措置は不要である。こうした議論をマルサスは可能にした、と David Parker は指摘した上で、このような思想的背景によって、社会における貧困層に対する法的な救済措置はなかなか行われなかったことを指摘している（164-65）。その一方で 1840 年代は、農作物の不作や自由貿易の影響により「飢餓の 40 年代」とも呼ばれ、貧困層がそれまで以上に困窮した時代であった。Parker は、1840 年代初頭は特に労働者階級にとっては、政府や富裕層が自分たちを無視していると感じても不自然ではない時代だったと述べている（166）。
1843 年には、工場で働く児童労働の実態調査についての第二次調査報告書が出されている[Tillotson 165]。この報告書の発表直後、詩人のエリザベス・ブラウニングは、"Do ye hear the children weeping, O my brothers" という一文で始まる"The Cry of Children"という作品を発表している[Parker 166]。ここでブラウニングは、同時代の社会における児童労働の実態や、子どもの貧困の現実に気づかずにいる人々が一定数いる、という現実を踏まえ、そうした人々に声を聞かせようという意図を表現していると言える。
このブラウニングの作品にディケンズがどれほど直接的な影響を受けたのかは定かではないが、同じ第二次調査報告書は、『クリスマス・キャロル』の直接の着想源ともなった。これについてディケンズは当初、「貧者の子供に代わって書かれたイギリス国民への懇願書」と題した政治パンフレットを書くことを考えていたが、最終的に『クリスマス・キャロル』を執筆し、それを「鍛冶屋のハンマーを打ち下ろした」と表現した。

ブラウニングの詩の 4 ヶ月後に出版され、タイトルを『クリスマス・キャロル』という歌を指すものとしたディケンズの作品もまた、本来聞こえないはずの死者たちの声にスクルージの、そして読者の注意を喚起することに始まり、社会の中で声をあげる手立てを持たない社会的弱者の声、すなわち子どもたちや貧しい労働者の声を、彼らに代わってひろいあげ、広く社会のなかに響かせようとした物語だと読むことができるのである。

引用文献

Browning, Elizabeth Barrett. *The Complete Works of Elizabeth Barrett Browning.* Vol. 3. Edited with Introductions and Notes by Charlotte Porter and Helen A. Clarke, 12 vols, Thomas Y. Crowell & Co, 1900.
Davis, Paul. *The Lives and Times of Ebenezer Scrooge*. Yale UP, 1990.
Dickens, Charles. *A Christmas Carol*. Edited by Ruth Glancy, Oxford UP, 1988.
Freud, Sigmund. "The Theme of the Three Caskets." *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol. 12, Translated under the General Editorship of James Strachey, Hogarth P, 1958.
Parker, David. *Christmas and Charles Dickens*. AMS P, 2005.
Tillotson, Kathleen. "A Background for *A Christmas Carol." The Dickensian*, Winter 1993, 89, 431, pp. 165-169.